

令和2年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)

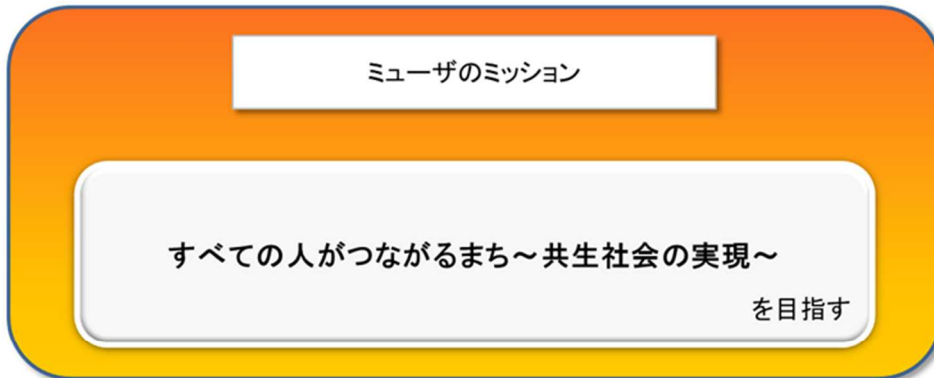
自己点検報告書

団 体 名	公益財団法人 川崎市文化財団
施 設 名	川崎シンフォニーホール（ミュージア川崎シンフォニーホール）
助 成 対 象 活 動 名	～音楽で人と人をつなぐ～ 音楽によるまちづくり推進事業
助 成 期 間	5 (年間)
内 定 額	53,917 (千円)

1. 事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図（概念図）



【頂点】

最高峰の音楽芸術の創造・発信

フランチャイズ・オーケストラとともに国際的レベルの音楽創造・発信を推進する

我が国のオーケストラ文化発展への貢献



【広がり】

音楽のすばらしさと演奏の喜びを味わう

コンサートへの市民参加の増加



【まちのシンボル】

「音楽のまち・かわさき」を国内外に発信
音楽を通じてシビックプライドを高める

まちのシンボルとしての認知度向上



【未来】

子ども達の感性豊かな心の成長と豊かな人生

子どもたちが音楽と関わる機会の増大



【多様性】

多様性を認め合う社会、誰もが文化芸術に親しむ

コンサートに出かけやすい環境づくり

多様な人々による演奏参加機会の創出



(2) 令和2年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	モーツァルト 歌劇「フィガロの結婚」～庭師は見た!～	2020年9月19日 ※	歌劇「フィガロの結婚」～庭師は見た!～ 指揮・総監督：井上道義 演出：野田秀樹 アルマヴィーヴァ伯爵：ヴィタリ・ユシユマノフ、伯爵夫人：ドルニオク綾乃、スザ女（スザンナ）：小林沙羅、フィガロ（フィガロ）：大山大輔 ほか	目標値	1,200
		ミュージザ川崎シンフォニーホール		実績値	514
2	GoGB プロジェクト	通年※	① 『歓迎ソング』 内容を変更して実施 ② マイケル・コリンズ クラリネット・ワークショップ【中止】	目標値	参加者 150、入場者 1,500
		ミュージザ川崎シンフォニーホールほか		実績値	70名 (2700 視聴)
3	【公演中止】 ホールアドバイザー 秋山和慶 企画	中止	新型コロナウイルス感染症の影響により公演を中止した	目標値	1,300
		ミュージザ川崎シンフォニーホール		実績値	0
4	ホールアドバイザー小川典子企画	2020年11月7日 (土) ※	ピアノ：小川典子、プレトーク：下田幸二	目標値	600
		ミュージザ川崎シンフォニーホール		実績値	463
5	パイプオルガン・コンサート・シリーズ	2020年10月25日 ～2月20日 ※	パイプオルガン：デイヴィット・ティッターリントン（中止）、富田一樹、大木麻理 ほか	目標値	2,353
		ミュージザ川崎シンフォニーホール		実績値	1,084
6	フェスタ サマーミュージザ KAWASAKI 2020	2020年7月23日 ～8月10日 ※	管弦楽：東京交響楽団、NHK 交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、読売日本交響楽団、群馬交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、ほか	目標値	22,000
		ミュージザ川崎シンフォニーホール		実績値	8,520人 (33,609 視聴)
7	モーツァルト・マチネ	2020年5月23日 ～2021年3月6日 ※	管弦楽：東京交響楽団 指揮：井上道義、沼尻竜典 弾き振り：大谷康子、小菅優 ほか	目標値	4,800
		ミュージザ川崎シンフォニーホール		実績値	1,746
8	地域連携・アウトリーチ公演事業	通年 ※	ピアノ：小川典子 ほか	目標値	①450／②600／ ③30
		ミュージザ川崎シンフォニーホールほか		実績値	① 160 / ② 2,800 視聴 ／③4
9	ミュージザ・ワークショップ・インターン養成事業	2021年2月14日※	マイケル・スペンサー ほか	目標値	インターン3/ WS20

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		実績値	20 (オンライン)
10	【事業中止】若手支援事業	中止※	新型コロナウイルス感染症の影響により事業を中止した	目標値	出演 20 / 入場 300
		ミュージザ川崎シンフォニーホールほか		実績値	0
11	【公演中止】音楽大学フェスティバル・オーケストラ演奏会	中止※	新型コロナウイルス感染症の影響により公演を中止した	目標値	出演者 200、入場者 1,400
		ミュージザ川崎シンフォニーホールほか		実績値	0
12	【公演中止】ジュニア・オーケストラ育成	中止※	新型コロナウイルス感染症の影響により公演を中止した	目標値	出演者 50、入場者 500
		ミュージザ川崎シンフォニーホールほか		実績値	0
13	音の放課後プロジェクト；人材育成部門	2020年4月～ ※	新型コロナウイルス感染症の影響により変更・中止した	目標値	112
		ミュージザ川崎シンフォニーホールほか		実績値	22 (オンライン)
14	音の放課後プロジェクト；普及啓発部門	2020年4月～ ※	新型コロナウイルス感染症の影響により変更・中止した	目標値	1,732
		ミュージザ川崎シンフォニーホールほか		実績値	49,715 視聴
15	MUZA ジルベスターコンサート 2020	2020年12月31日 ※	指揮：下野竜也 ナレーション・バリトン：宮本益光 ピアノ：小川典子 ヴァイオリン：南 紫音 管弦楽：東京交響楽団	目標値	1,354
		ミュージザ川崎シンフォニーホール		実績値	864
16	ミュージザの日 2020	2020年7月1日 ※	新型コロナウイルス感染症の影響により変更・中止した	目標値	10,000 (うち公演 1500)
		ミュージザ川崎シンフォニーホール		実績値	1,089 視聴

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定通りに事業が進められているか。

(ミッション) すべての人がつながるまち～共生社会の実現をめざす～

「音楽のまち・かわさき」のシンボルとして、川崎市の「総合計画」、「川崎シンフォニーホール条例」、「川崎市文化芸術振興条例」、「かわさきパラムーブメント推進ビジョン」や国の政策、法律に基づき、質の高い音楽文化の発信拠点として音楽の裾野の拡大と、音楽都市としてのブランド形成に寄与するとともに、近隣都市の市民、団体、企業等との地域連携や国内外の時代を担う音楽関係者を含めた人材育成、教育普及、そしてあらゆる人々が共に鑑賞できる場の創造と次の5つの柱に沿って事業計画を立てた。

「頂点」「広がり」「まちのシンボル」「未来」「多様性」

しかし、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により、施設の休館、公演の中止等によるチケット代金や施設利用料・設備使用料の返還、感染症拡大防止対策用のガイドライン作成等、様々なイレギュラー対応を余儀なくされたが、適切かつ迅速に実施することが出来たと考える。

大変困難な状況ではあったが、当初の目標・目的を見失わず、本補助事業「総合支援」をいただいている劇場としての役割、文化芸術活動が制限されるなか、様々な工夫を凝らしながら絶えずお客様へ音楽を届けることを念頭に置き、「音楽のまち・かわさき」の火を消さぬよう、また、お客様の安全を第一に配慮しながら、事業展開を積極的に図った。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

前述の通り、アウトカム・目標設定の考え方は国及び川崎市の政策に基づき、地域の実情を踏まえ、事業計画とともに設定をし、実施出来た事業についてはコロナ禍での新たな取り組みなどが大きく取り上げられるなどした。

■コロナ禍での主な取り組み

特筆すべきはホールのメイン事業「フェスタ サマーミュージック KAWASAKI 2020 (事業6)」である。1回目の緊急事態宣言解除後すぐに無観客配信の企画を先行して計画したが、状況が緩和されたため観客も入れて実施する事を決断し、有観客+生配信の「ハイブリット開催」として実施、19日間全17公演、感染者を出すことなく完遂した。日本のみならず世界中の音楽祭が中止になる中「ザルツブルク音楽祭」と並んで評価され、『復活の歌を響かせた各オーケストラ』(2020.11「MOSTLYCLASSIC」)、『日本クラシック界「川崎の奇跡」』(2020.9「選択」)など多くの新聞雑誌に取り上げられた。さらには従来物故者に贈られることが多かった第33回ミュージック・ペンクラブ音楽賞 クラシック部門《功労賞》を受賞した。同様に新型コロナウイルス感染症の影響によりオペラや合唱の入った公演の開催を慎重になっている中、専門家の助言をいただきながら感染症対策を十分に行い開催した「フィガロの結婚～庭師は見た!～」(同1)も、北九州、東京の2劇場と連携しながら無事全公演を終える事が出来た。これらの取り組みは文化的、社会的、経済的にも大変意義があった。

一方で、普及啓発のシンボル事業としての「ミュージックの日」(同16)は、緊急事態宣言解除後すぐであり、主に子どもや家族連れを対象とした事業のため、安全を考慮して無観客の収録配信を行った。ステイホーム中の子どもがいる家庭を対象としたオーケストラ入門編を配信。視聴した障害児の保護者から「今までおとなしく座っていることが出来ず、ホールに行くことを躊躇していたが、はじめて1時間以上のコンサートを聴くことが出来た。これに続くサマーミュージックの1時間のシンフォニーもじっと聞くことが出来た。とても良い経験だった。」という感想をいただいた。「音の放課後プロジェクト; 普及啓発部門」(同14)では、いつも会場に集まって行っていたワークショップを「音のワークショップ・オンライン」として開催。ロンドンのファシリテーターと日本の家庭にいる子どもたち、通訳がオンラインで集まり新しい体験を楽しむことが出来た。この取り組みについては、「ミュージック・ワークショップ・インターン」(同9)の「オンライン・シンポジウム」にて報告・ディスカッションを行った。

やむを得ず休館しなくてはならなかった期間も中止となった事業を配信に切り替えるなど、限られた状況の中でも劇場としての活動を止めることなく発信し続ける事が出来たのは、2011年の東日本大震災で2年間の休館を余儀なくされた際「ハードが無くてソフトがある」「それを届ける、伝えるためにはどうしたらよいか」を最優先に考えるという精神が、人材の入れ替わりなどに影響を受けず、脈々と受け継がれてきた結果ではないかと考える。そしてそれが感染症対策に苦慮している全国の劇場・音楽堂等や演奏団体の一つの指針となれたのであれば大変大きな成果であり、大きな意義のある取り組みであったと考える。

(2) 有効性

自己評価

目標が達成し、アウトカムの発現は可能か。

■フランチャイズ・オーケストラとともに国際レベルの音楽創造・発信を推進する

■我が国のオーケストラ文化発展への貢献

2月末以来、約5か月という長期にわたる公演中止を経ての再開となった前述の「フェスタ サマーミュージック KAWASAKI 2020 (同6)」は、感染症対策を行いながら持続可能なコンサートスタイルへのチャレンジでもあった。ホールの定員は1/3以下の600人に減らし、かつ有料での映像配信を実施するというハイブリッド方式で開催。3月に発表した当初のプログラムからは舞台上の人数を減らすため大幅な変更を余儀なくされ、来日不可能となった外国人指揮者が収録映像で出演(7/23 東京交響楽団 指揮 ジョナサン・ノット)、オーケストラ2団体(7/25 NHK 交響楽団、8/1 群馬交響楽団)が活動自粛後初の有観客公演への出演となるなど、現在の社会状況に大きく影響を受けた開催となった。

2019年度の参加人数32,244人に対し、2020年度のホール来場者は7,830人、オンライン総再生回数31,982回、合わせて39,812人が楽しんだことになり、困難な状況下で変更せざるを得ない状況の中、本事業が目指してきた目標を達成することが出来たのではないかと考えられる。

来場者アンケート結果より、当日来場公演の満足度「とてもよかった」+「よかった」は96%を記録。特に「とてもよかった」と評価した人は80%、2019年と同等で、充実した内容を提供できたと言える。

(公式ウェブサイト:ユーザー 397,710名/年間、ページビュー 2,694,198件/年間※うち約10%は海外からのアクセス)

■コンサートへの市民参加の増加

■まちのシンボルとしての認知向上

市民が出演者として参加する音楽祭は新型コロナウイルス感染症の影響により軒並み中止となったが、その期間に動画配信を多数企画。ステイホーム期間の地域住民へ少しでも音楽を届ける事が出来たと考える。また、単なる配信だけではなく応募企画「GoGB プロジェクト」(事業2)など、参加型の企画も行った。

YouTube登録者数 夏800人→1,320人

4月以降の動画件数 45件 総視聴数 11万回

■子どもたちが音楽と関わる機会の増大

毎年希望者が多く抽選になる「ジュニア・プロデューサー」企画公演も、今年は公演が中止となってしまったが、早期に内容を変更し、ワークシートを作成し、郵送、メールでのやりとりで実施した。そのジュニア・プロデューサーを卒業した中高生たちは、「リトルミュージック」として活動。こちらはオンラインミーティングを駆使しながら活動を行った。実際に集まることが無くても「時間を共有できる場」があることがとても大切だと実感した。(事業12)鑑賞面では複数事業でU25チケットを設定。年間の平均利用率は5%、事業によっては10~20%の利用も見られ、家族連れでの来場促進にもつながったと考える。

また、教育機関との連携により、定期的な情報発信、子ども達が音楽に関わる機会の提供を行っている。(音の放課後ニュースは年3回作成・1回につき約80,000部発行、ロータリーシート 実施公演3回21人参加。)

■コンサートに出かけやすい環境づくり

2020年度から「ダイバーシティスタッフ制度」を本格導入し、初めての方も安心して来場することが出来、繰り返し来場する方とはコミュニケーションを深める事が出来、サービスの向上につながっている。

また、「ミュージックの日2020」(事業14)では、自宅で過ごすことが増えている子ども・家族向けにウェルカムコンサートの無観客配信を実施したことについて、障害児の母から「今までじっとすることが出来ず、ホールに行くことを躊躇していたが、はじめてコンサートをじっと聞くことが出来た。とても良い体験だった」という感想をいただいたのは思いがけない成果であり、今後の取り組みの大きなヒントとなった。

■多様な人々による演奏参加機会の創出

新型コロナウイルス感染症の影響により、学校現場も大変な中ではあったが、平日頃からの連携により、川崎市内にある特別支援学校への訪問が実現した。

■共通の目標値に対する達成度

入場者・参加者数、参加者率、収益率について、新型コロナウイルス感染症の影響によりいずれも大幅な減となった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

■事業期間・事業費について

令和2年度申請した16事業のすべての事業が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による休館、自粛要請、外国人アーティストの入国制限等による公演中止（変更）、販売座席数の制限等により、目標を達成することが困難な状況となった。

助成対象経費の総額については、20%を超える金額の変更が生じた。（変更承認申請書提出）

■総入場者数

音楽ホール全体の目標値を「主催・共催公演数：100回、主催・共催公演音楽ホール入場者数：100,000人」と設定していたが、音楽ホール公演の入場者数について、主催事業では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため28公演が中止となり、最終的に49公演実施、入場者数は21,144人となった。共催公演は、10公演を実施し、入場者数は8,760人だった。合わせて59公演実施、入場者数は29,904人となった。

補助対象事業についても、実際にホールへ来場される方を想定とした目標値50,674人に対し、来場者は12,341人となり、目標比は26%と大きく減少した。一方で、無観客でのオンライン配信、ハイブリット開催等を行い、総視聴数は約9万回となり。ホール来場者と併せると200%と大きく上回った。

■その他

配信事業を展開していく中で、想定外の経費が発生し、視聴料収入（多くは無料配信）だけでは賅いきれないため、他の補助金に申請するなどして資金確保に努めた。それにより、新型コロナウイルス感染症拡大の中で外出をためらうファンのみならず、何らかの障壁がありホールに来場することが出来ない（出来にくい）方へ向けた配信による音楽鑑賞を提供するなど、新たな生活様式の提唱に取り組むことが出来た。

今後も引き続き顧客開拓、属性把握など戦略を立て、新たな生活様式かつ社会的、経済的意義が期待できるよう取り組んでいく。

(4) 創造性

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性等に優れている（と認められる）か。

前述の通り、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業計画の大幅な見直しを行った。そのため、当初の計画にはなかった取り組みとして、有観客+配信「ハイブリット開催」や、オンラインを活用したワークショップ、合唱団を集める事が難しい状況での「リモート合唱団」と、これらの取り組みはコロナ禍での新たな取り組みとして、また、既成概念にとらわれない独創性、新規性、先導性いずれも優れているものとする。

■劇場・音楽堂等を象徴する人物、鍵となる人物（キーパーソン）の存在

チーフアドバイザーの秋山和慶（指揮）をはじめ、松居直美（パイプオルガン）、小川典子（ピアノ）、3名をアドバイザーとし※、年2回の市長との会議のほか、各専門における提言（楽器のメンテナンスなど）や、事業企画への助言などにより、事業への独創性、先導性が生まれている。

※佐山雅弘（ジャズピアノ）、H30年にご逝去、後任については設置者と協議中。

■専属団体、フランチャイズ団体、提携団体の存在

川崎市のフランチャイズ・オケである東京交響楽団（以下、東響）は同団音楽監督ジョナサン・ノット氏のもとトップレベルの演奏を展開、専門誌等で高い評価を得ている一方で、川崎市内学校や施設への巡回公演等も実施している。

■創造活動に関わる建物設備等

世界的指揮者サー・サイモン・ラトル氏が「世界最高の音響」と絶賛。クラシック音楽に適した残響設計をはじめ、様々な要素が世界最高水準のホールとして機能している。平成31年1月～6月に実施した機械設備等更新工事では、スピーカーの入れ替えにより、全方向への適切な音響を確保、一部の客席において発生していた聞こえづらさが改善された。

■安全確保のための取り組み

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、川崎市と協議し、国や県、市及び関係機関が定めるガイドライン等を踏まえ、政府の専門家会議の委員を努める感染症の専門家からのアドバイスを受けながら、ミュージアム川崎シンフォニーホールのガイドラインを作成・遵守し、より安全なホール運営に努めた。

■公演事業

特筆すべきは、フェスタサマーミュージアの開催についてである。客席数は600席に制限しての開催となったが、「ハイブリッド形式」で開催した。休館中も中止となった事業を配信に切り替えるなど、限られた状況の中でも劇場としての活動を止めることなく発信し続ける事が出来た。そのような取り組みは、感染症対策に苦慮している全国の劇場・音楽堂等や演奏団体の一つの指針となれたのであれば大変大きな成果であり、大きな意義のある取り組みであったと考える。

■人材育成、普及啓発

新型コロナウイルス感染症の影響により、多くの事業は中止となってしまったが、ジュニア・プロデューサー企画はワークブックを活用した通信制で実施。リトルミュージア企画はオンラインに切り替えて実施。また、公演事業と同様に、中止となった事業を配信。これらの事業を外部に委託するのではなく、職員やホールに関係するアーティストが自らコーディネート、ファシリテートするため、独創性が生まれ、よりスピーディに計画を実施することが出来、その結果として先導性も見られると考える。

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている（と認められる）か。

■メディアへの露出

緊急事態宣言後の公演再開に向けての取り組みが多くのメディアから取材を受けた。これは、公演再開の周知と同時に感染症対策についても早々に検討し、実施してきたことが考えられる。

大手新聞各社、テレビ局の取材・問い合わせが開館以来最大の反響であった。これは因らずも起きた反響ではあるが、クラシック音楽の新しい可能性について、業界全体、社会全体へ投げかける事ができ出来、劇場としての大きな役割を担う事ができ出来た。

■外部からの評価

コロナ禍の中で、感染症拡大防止対策を実施しながら真夏のフェスティバルである「フェスタサマーミュージック KAWASAKI2020」を聴衆を入れた公演とインターネットによる生配信のハイブリッド型で開催するなど、創意工夫を凝らして例年並みの公演規模で完遂したことに対し、日本のみならず世界中の音楽祭が中止になる中「ザルツブルク音楽祭」と並んで評価され、『復活の歌を響かせた各オーケストラ』（2020.11「MOSTLYCLASSIC」）、『日本クラシック界「川崎の奇跡」』（2020.9「選択」）など多くの新聞雑誌に取り上げられた。

さらには第33回ミュージック・ペンクラブ音楽賞において「功労賞」を受賞。また、前年度に開催予定だった東京交響楽団との共催事業「名曲全集第155回」については、ミュージック川崎シンフォニーホールからの提案で無観客公演として開催し、CD化。このCDも同音楽賞の「オーディオ・パッケージ部門」を併せて受賞。

■観客、参加者等の反応（鑑賞者アンケート含む）

・友の会会員（有料）4,298名…毎月DM発送／ウェブ会員（無料）40,502名（2021年5月31日現在）

・公式ウェブサイト：ユーザー 397,710名／年間、ページビュー 2,694,198件／年間

※うち約10%は海外からのアクセス

・フォロワー数：フェイスブック 5,972名／ツイッター9,573名／インスタグラム 1,092名／YouTubeチャンネル登録者数 1,400人（各2021年6月7日現在）

・コロナ以降に実施した動画配信の総視聴回数 413,753回（55本の動画制作）（2021年1月25日現在）

・鑑賞者アンケートは、年間を通じてフォーマットを統一、第三者機関の分析により多角的にニーズを明らかにしていく。友の会会員に対しては2年に一度調査を実施、報告することでニーズを把握し相互的な関係を維持している。

■視察・研修の受け入れ

音楽ホールの視察を受け入れ、ホールの施設や事業の説明等を行うことにより、他ホールや自治体職員等の方々に、施設やミュージック川崎シンフォニーホールにおける意欲的な事業内容の紹介とともに、川崎市における「音楽のまち・かわさき」や「パラムーブメント」を併せて紹介し、川崎市の取り組みを多方面にアピールすることが出来た。また、例年はバックステージツアー等を通じて多くの方々にミュージック川崎シンフォニーホールの魅力をアピールしてきたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、一般の方々による視察は見送った。

・行政・出資法人・学校 4団体

・ホール・音楽団体 103名

・総合学習・職業体験 1校

・企業・団体等 8名

・インターン 4名

■外部講師派遣等

・政策研究大学院大学公共政策プログラム文化政策コース

劇場活動にかかる評価リテラシー育成のための教育プログラム開発、自己評価ガイドブックの作成及び調査アプリの開発「自己評価の事例：結果をどう生かすか」 講師：竹内 淳（事業部長）

・「全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会2021」

劇場・音楽堂からのオンライン配信の試みと今後の可能性 講師派遣：竹内淳（事業部長）

・日本音楽芸術マネジメント学会パネルディスカッション

「with/after コロナ時代の創造を考えるー動画配信の試み」

フェスタサマーミュージック KAWASAKI2020

有観客およびライブ映像配信によるハイブリッドでの開催について 登壇者：前田明子（事業企画課係長）

(5) 持続性

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

令和2年度は新たに始まった指定管理期間（第4期/10年）の1年目として新たなる1歩を踏み出し、今まで以上の飛躍を目指し、利用者及び来場者の確保・拡大にむけ、効率的な運営、魅力的な事業の展開、効果的な広報宣伝に努め、併せて、インクルーシブなホールを目指し、バリアフリー化へ積極的に取り組む予定であった。しかし、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により、施設の休館、公演の中止等によるチケット代金や施設利用料・設備使用料の返還、感染症拡大防止対策用のガイドライン作成、施設の改善、備品の設置等、様々なイレギュラー対応を余儀なくされたが、対応に伴う費用や、機会損失の補填等の財政的支援についても設置者である市と仔細にわたって協議を重ね、度々、収支状況を確認しながら、施設の運営に大きな支障が出ないように、調整を図り適切かつ迅速に実施することが出来た。

各課の組織活動の持続的な発展については、四半期毎に「課題と重点取組」を作成・検証することによりPDCAを実施し、全職員にて情報共有することで、全体での課題の把握、意識統一を行い、ビジョンや目標を達成すべく、更なる機能向上を図った。

また、就業規則の改定等による長期的・継続的な雇用環境づくり、自己評価制度の導入、女性従事者が多い職場ならではの女性の就業環境向上への取組み等、労働環境の整備による職員の長期雇用への取り組み、人材確保、職場での各テーマに基づいた専門的な研修実施及び外部でのセミナー・講習受講による職員のスキルアップを図った結果、主催事業等の充実やより魅力的な施設運営に反映され、入場者確保に繋げている。

今後の持続的なアウトカムの発現・定着に向けては、債務負担行為による指定管理料の安定した獲得、事業積立金の実施、効率的な執行等経営努力による事業経費の削減、事業収入を獲得するためのホールファンである友の会会員の確保、外部資金調達の大きな資金源となる企業や個人からの寄付「ホールスポンサー制度」の拡大、民間企業からの協賛金獲得等、様々な面からのアプローチを図り、健全な収支バランスを保っていけるよう努めていく。

このような効率的な事業執行等で生じた利益は将来の利用者サービスのために積み立て、更に利用者サービスや新たな事業実施等へ還元することにより、公共ホールとしての役割を果たし、更なるホールファンを増やしていく好循環を生み出していく。「音楽のまち・かわさき」の認知拡大や、更なる市民の参加を図り、最終的には市民の幸せに繋がるよう、持続的なアウトカムの発現・定着につなげる。